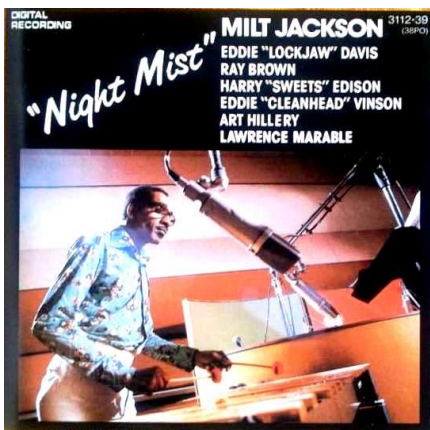


ミルト・ジャクソン (1923/1/1 ~ 1999/10/9 アメリカ合衆国 ミシガン州 デトロイト生れ) * ヴァイブラフォン奏者
デューク・エリントンやカウント・ベイシーを聴いてジャズに興味を持ち、特にライオネル・ハンプトンの影響を受ける。
トランペット奏者のディジー・ガレスピーに招かれ、ニューヨークへ行き彼のバンドでプレイ。
ガレスピーのバンドを去った後はセロニアス・モンク、チャーリー・パーカー、レイ・ブラウンらと共演を重ねる。
1951年、ジョン・ルイス、パーシー・ヒース、ケニー・クラークと”ミルト・ジャクソン・カルテット”を結成。
その翌年には”モダン・ジャズ・カルテット”(MJQ)とグループ名を変え、以降1974年7月の解散までMJQメンバーとして活動。目の下の弛みに因んだニックネームは、アルバムや曲のタイトルにもしばしば自ら使った”Bags”。

1

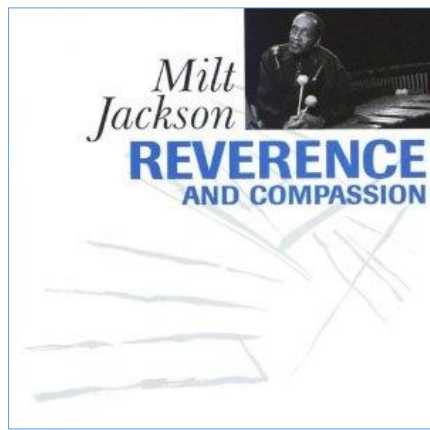


Blues in My Heart (Milt Jackson / Night Mist (1980)) '5:33'

Milt Jackson (vib), Eddie "Lockjaw" Davis (ts), Ray Brown (b),
Harry "Sweets" Edison (tp), Eddie "Cleanhead" Vinson (as),
Art Hillery (p), Lawrence Marable (ds)

ベニー・カーターが作曲した、ブルージーなムード溢れる曲。
ミュートの効いたハリー・エディソンのトランペットとレイ・ブラウンの分厚い
ベースで始まり、ゆったりとした心地よい流れに乗って各メンバーのソロが
入替わり展開されていきます。硬質ながら温かみもあるミルトのヴァイブが
リラックスした気分を誘います。

2



Reverence

(Milt Jackson / REVERENCE AND COMPASSION (1992)) '4:18'

Milt Jackson (vib), Cedar Walton (p), John Clayton (b), Billy Higgins (ds),
Oscar Brashear (tp), George Bohanon (tb), Jeff Clayton (as),
Gary Foster (as, fl), Ronald Brown (ts), Jack Nimitz (bs, b-cl) & Orchestra

本日の紹介アルバムの中で最も新しい録音で、当時69歳のミルトが大編成
オーケストラをバックにゴージャスな世界を表現した傑作盤。
紹介するアルバムタイトル曲の”Reverence”は当時FM放送等で日本信販の
CMに使用されていました。迫力ある演奏はビッグ・バンドならではの魅力。

3



The Late Late Blues

(Milt Jackson & John Coltrane / bags & trane (1959)) '9:32'

Milt Jackson (vib), John Coltrane (ts),
Hank Jones (p), Paul Chambers (b), Connie Kay (ds)

ジョン・コルトレーンが新時代の若手サックス奏者として頭角を現していた
時期の録音。
弦を弾く指が見えるようなポール・チェンバースのゴリゴリとしたベース音、
上品なハンク・ジョーンズのピアノなど、ジャズの醍醐味が独特の音場感で
捉えられたアルバム。コルトレーンの熱いテナー・ソロもたつぷりと味わえ
ます。

曲名 (収録アルバムタイトル (録音年)) '演奏時間'

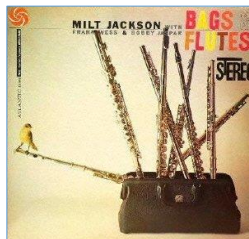
ミルト・ジャクソン その他の主要アルバム



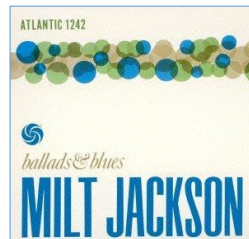
milt jackson



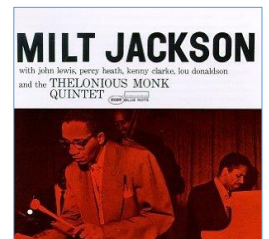
Soul Pioneers



BAGS & FLUTES



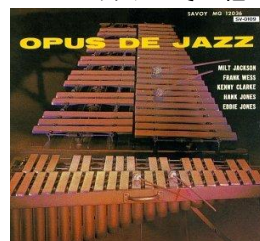
ballads & blues



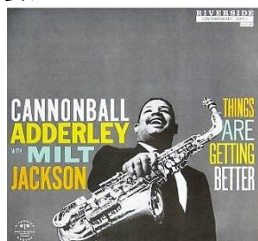
with Thelonious Monk Quintet

4		Soul Brothers (Milt Jackson & Ray Charles / Soul Brothers (1958)) '9:33' Milt Jackson (p, g), Ray Charles (as), Billy Mitchell (ts), Skeeter Best (g), Oscar Pettiford (b), Connie Kay (ds) 今回の紹介曲中、ヴァイブラフォンが入っていない唯一の曲。 歌手そしてピアニストであるレイ・チャールスがアルトを吹き、ミルトがピアノとギターを弾くという貴重な1曲。やや粗削りながら奔放なレイ・チャールスのアルト、ミルトのいぶし銀のようなピアノとギター。タイトル通り、アーシーでソウルフルな、まさに“Soul Brothers”による最高傑作曲。
5		Love on My Mind (Ray Charles & Milt Jackson / SOUL MEETING (1958)) '3:45' Ray Charles (p), Milt Jackson (vib), Kenny Burrell (g), Percy Heath (b), Art Taylor (ds) 先の“Soul Brothers”と同時期に録音されたアトランティックの姉妹盤ですがメンバー構成はガラリと変わります。 ブルース感が滲み出るレイ・チャールスのピアノとミルトの抒情的ヴァイブのコラボレーションが美しいメロディアスなバラード。そこにケニー・バレルの渋いギターが控えめながら良い味を添えています。
6		Frankie and Johnny (Milt Jackson Quintet / THAT'S THE WAY IT IS (1969)) '6:40' Milt Jackson (vib), Teddy Edwards (ts), Monty Alexander (p), Ray Brown (b), Dick Berk (ds) * Shelly's Manne-Hole でのライブ録音。 歓声や掛け声など、ライブ会場が一体となって心の底から楽しんでいる光景がありありと浮かぶ、とにかくスイングで気持ちのよい1曲。 モンティ・アレクサンダーのピアノとレイ・ブラウンのベースによるイントロからデディ・エドワーズの実に爽快なテナーへ、続いてミルトのヴァイブ、各ソロへと展開します。ニクイ演出のエンディングに観客も思わず喝采。
曲名 (収録アルバムタイトル(録音年)) '演奏時間'		

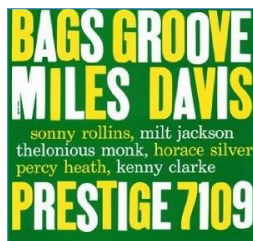
ミルト・ジャクソン その他の主要アルバム



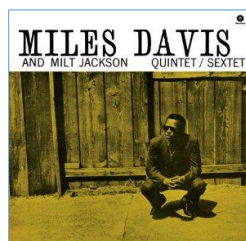
OPUS DE JAZZ



CANNONBALL ADDERLEY
with MILT JACKSON /
THINGS ARE GETTING BETTER



MILES DAVIS
BAGS GROOVE



MILES DAVIS AND
MILT JACKSON
QUINTET / SEXTET



OSCAR PETERSON
with MILT JACKSON /
VERY TALL